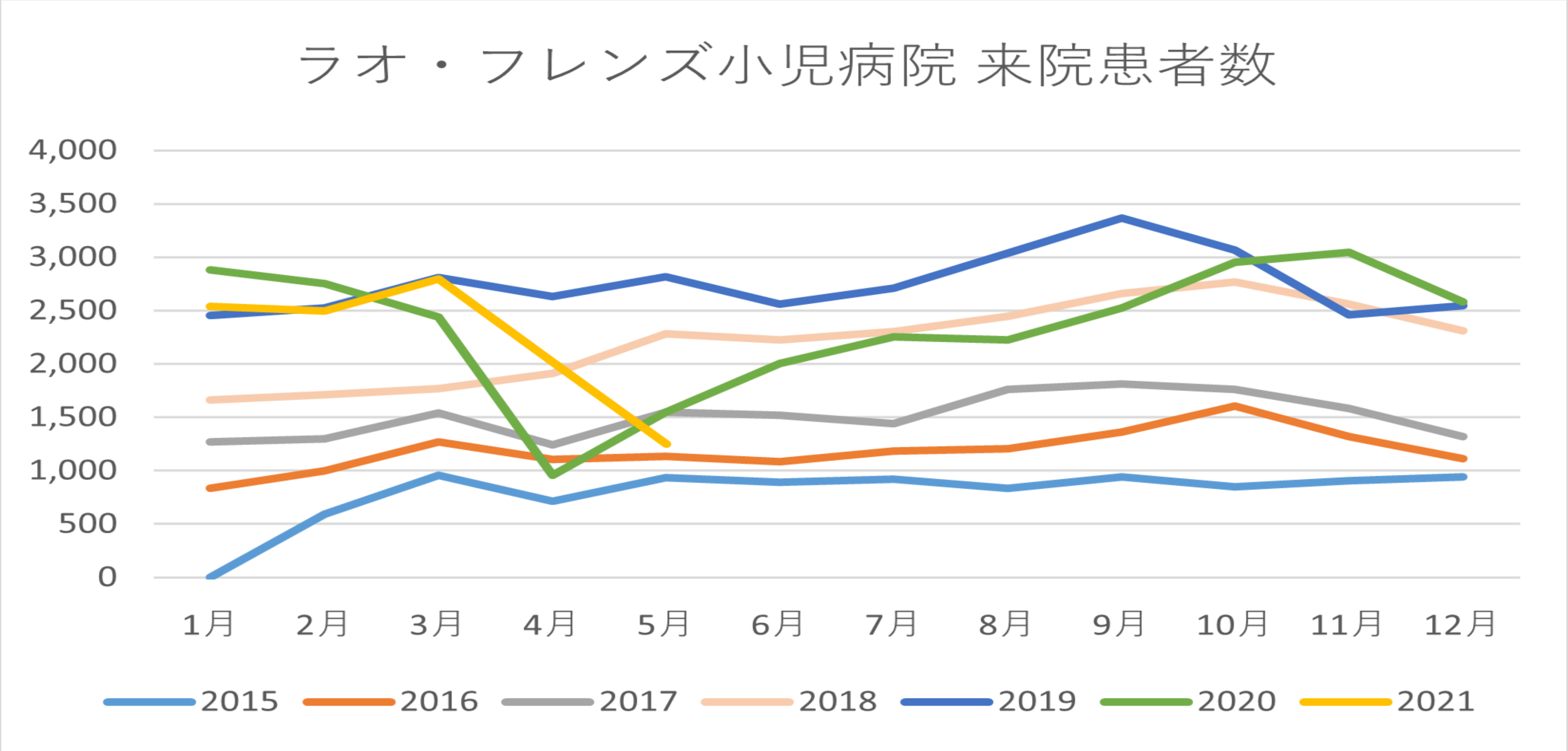
ラオ・フレンズ小児病院

2021年1月から6月の出来事

昨年から引き続き、世界中がコロナ感染の話題で終始している状況ですが、ワクチン接種が各国で進み新たなステージへ向かっているという印象です。そんな中、ラオスでは昨年3月下旬から1か月半に渡りロックダウンを含む厳しい規制を実施し、国内の感染者数を50名程度に抑え込んでいました。ところが、4月のお正月の期間に海外からの人の移動もあり、市中感染から一気に感染者数が増加。6月30日現在、感染者合計は21,221名と公表されています。4月中旬からのロックダウンにより県間や郡間の移動は、6月に入り感染者が減少傾向になったことを受け、規制が多少、緩和されました。現在は感染の状況に応じた“ゾーン規制”(赤・黄・緑による感染リスク分け)が行われています。なお、国外からの入国は昨年から厳しく制限されており、ビザは発給中止に。定期便での入国もできません。様々な手続きを経て入国しても、14日間のホテル隔離とワクチン接種が完了していない人は、飛行機での移動や県をまたぐ移動に制限が設けられています。今回は、ラオスのコロナ対応や隔離事情、ロックダウン中でも明るく元気に日々の診療を続けた病院の様子などをお届けしたいと思います。

Copyright © 2021 Friends Without A Border. All rights reserved.



この半年間の来院患者数の動向からお伝えいたします。

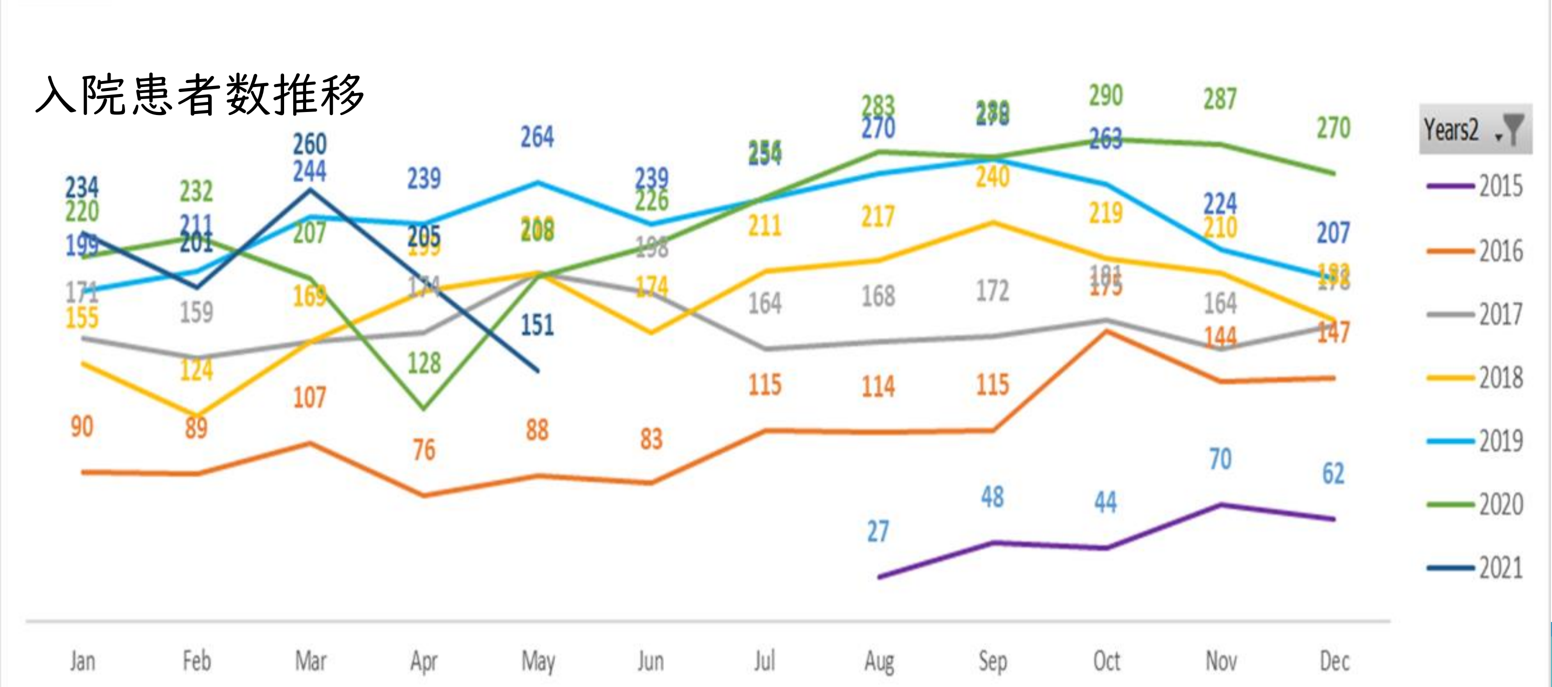
昨年のロックダウン時（3月下旬～５月上旬）同様、今年も厳しいロックダウンが実施されたことで、来院患者数は大幅に減少しています。ルアンパバーンは４月の感染者報告以降の新規感染者が出ておらず、ゾーン規制では一番感染リスクが低いグリーンゾーンに指定されました。県内の移動が多少しやすくなったとはいえ、依然、人々の足は医療から遠のいているように感じます。医療を受けなければならない子供たちが病院に来られずにいることがないかと、今回もまた、とても心配です。

Copyright © 2021 Friends Without A Border. All rights reserved.

このグラフは、2015年から現在までの入院患者数の推移です。

3月には昨年同時期を超える患者さんが入院していましたが、4月中旬からのロックダウンにより、昨年同様に入院患者数も激減しています。しかし、入院が必要な患者さんがいなくなることはなく一定数はいる状態でした。ロックダウン中は妊娠中のスタッフが自宅待機となるなど、スタッフの配置を変更して対応しました。今回のロックダウンは前回より感染の拡大が早く広範囲に及んだので、厳戒態勢がより強化されることに。交通手段の確保自体が困難になった上、移動には許可証が必要となり、また、県によっても対応が異なるため、他県から訪れる患者さんが特に大変だったようです。

コロナ抑制には効果的なロックダウンですが、“遠い医療”がさらに遠くなってしまうのは困ったなと思っています。コロナ以前からの問題である栄養失調や下痢をはじめとする感染症に罹患する患者さんは今も決して少なくない、ということを皆さんにお知らせしたいです。



Copyright © 2021 Friends Without A Border. All rights reserved.

ラオスのお正月(ピー・マイ・ラオ ＝ 年・新しい・ラオス)

4月14日から16日は、ラオスのお正月でした。ラオスでは、新居、結婚式、快気祝い、新年など新たに何かを始める時やよくないことが起きた時には“バーシー”というお祓い(お祈り)の儀式をします。病院の開院式でも行いましたが、昨年からのコロナ禍で病院も少なからず影響を受けましたし、今年は厄介なく物事がスムーズに進むようにというみんなの思いを、新年のバーシーに託すことに。バーシーの効果は人々の心に安寧をもたらすことかな、と感じます。終わった後には晴れやかな気分になるのですが、それはみんなの笑顔を見れば一目瞭然ですね。バーシーとみんなの笑顔で今年も乗り切ります!

Copyright © 2021 Friends Without A Border. All rights reserved.

子供の日恒例“清掃活動”

日本のこどもの日は5月5日ですが、ラオスでは「世界こどもの日」と同じ6月1日がそれにあたります。この日は毎年、スタッフ総出で敷地内清掃を行うのが恒例行事。

いつもはハウスキーパーさんにお任せしている院内の清掃ですが、こうして医療系、事務系スタッフもみんなで一緒のことをする時間というのは、とても大事ですね。チーム力アップにつながっているな、と思います。

ラオ・フレンズ小児病院は将来、現地化することを目指していますが、そこにはチーム力が必要不可欠。個々の成長がチーム全体の成長へとつながり、責任を持って病院を運営できるようになってほしい。そして、子供たちの命を守る責任感に発展していってほしい。

こんなことを考えていると、ついしみじみとスタッフの顔を見つめてしまいます。(;^_^A

Copyright © 2021 Friends Without A Border. All rights reserved.

ラオスと日本 4,000キロを結ぶ2つの出来事！

日本とラオスの距離は約4,000キロです。その4,000キロを繋ぐ出来事がありました。

これまでフレンズの活動はカンボジア、ミャンマー、ラオスといった海外が主であり、国内への貢献があまりできずにいました。小さいNPO故に、資金面でも管理面でも手を広げることができないというのが実情です。しかし、昨年からのコロナ禍に日本もとても大変な状況が続いています。日本国内に籍を置くNPOとして、何か元気が出るようなことをしたいと考えたのが『みんなで繋ぐ810（ハート♡）kmマラソン』（写真上）でした。2〜3月に実施したイベントですが、これからも第2弾、3弾と継続して行う予定ですので、ぜひ、こちらをご参照の上、ご参加くださいませ！https://fwab.jp/event/event_810-km/

そして、もうひとつの4,000キロ繋がりは、日本のロータリークラブの例会へのリモート参加です。厚木県央ロータリークラブさんからは、これまで様々な形でご支援をいただいておりますが、今年は院内の野菜ガーデンへのご支援をいただき、農業指導をZoomで行いました（写真右上）。また、大宮西ロータリークラブさんからも長年のご支援に対し、現地から「ありがとう！」をお届けするチャンスをいただきました。偶然滞在していた創設者の井津も加わり、現地から直接「ありがとう」と、感謝をお伝えすることができました（写真下）。コロナ禍で毎年お越しいただいていた視察が難しい状況ですが、現地と結び感謝の気持ちを伝えることができ、現地スタッフもとても喜んでいました。

Copyright © 2021 Friends Without A Border. All rights reserved.

LFHCが開院して6年が経ちました。いつもなら国内外のお客様・支援者の皆様にその成長と発展ぶりをご披露するチャンスとなる開院記念日なのですが、コロナ禍で海外からの来客をご招待することもできず、スタッフだけで記念撮影です。
6年前に患者さん第1号を迎え入れた時の情景が頭に浮かびました。みんなドキドキで動きもぎこちなかったですが、1日目を終了した時の安堵はきっと忘れないでしょうね。過去からつながる未来。コロナ禍は困難と前進の両方に影響がありましたが、日々、無駄な時間は1秒たりともなかったなと思います。6年目、7年目くらいから彼ら自身がそれを実感するのではないでしょうか。1年1年がとても楽しみです。来年はまた、皆さんをお迎えしての7周年記念をすることができたらいいなと思います。

ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）6周年記念

一回り大きくなったスタッフたちが勢ぞろいです。

Copyright © 2021 Friends Without A Border. All rights reserved.

カンボジアの村で

栄養士による新生児室に入院中のお母さんへ栄養指導

クラウドファンディング ー 授乳室建設

今年のクラウドファンディングのプロジェクトとなる授乳室の建設についてのお話です。小児病院なのにありそうでなかった授乳室を、ずっと作りたいと思っていました。
その理由は、

- 非日常の環境に身を置くお母さんと赤ちゃんが安心して授乳する場所が必要！：病気の子供を抱えて村の生活とはかけ離れた別世界の院内での環境、さらにたくさんの人たちが周囲にいる状況での授乳は、どれだけストレスを感じることでしょう。赤ちゃんとの優しい時間を確保できる場所が必要。
- 授乳の場面を有効活用することで助けられる命がある！：ラオスで妊婦検診を全く受けずに出産を迎えている人の割合が都市部で6%、地方では22.4%との報告がありました。妊婦検診は、妊娠の経過を見守り評価すると同時に、重要な教育の機会としての役割があります。院内にいる時間は健康に関わる情報が得られる貴重な時間でもあり、その情報を知っているかどうかで助かる命もあるほどです。授乳室はまさに、そうした場所になり得るはず。
- 教育病院として、ラオス国内でモデルとなる環境を作りたい！：LFHCはラオス政府からの依頼を受け、医療従事者や医療学生を受け入れている教育病院でもあります。教育病院としてふさわしいモデル病院であることが、国内の医療向上に大きく貢献することへと繋がるはず。

こうした理由がありながらも、病院の限られた財源の最優先事項は診断と治療です。年々増えている来院患者さんの診療にかかる経費を賄うことで精一杯でしたが、クラウドファンディングで建設を実現させたいと思いました。詳細は後日また団体ウェブサイト等で告知いたしますので、どうぞよろしくお願いいたします！

Copyright © 2021 Friends Without A Border. All rights reserved.

ラオスのホテル隔離14日間①

ラオスへの入国の条件はとても厳しくなっています。以前は首都ビエンチャンと私が住むルアンパバーンの2つの国際空港へベトナム、韓国、バンコク、中国などから定期便があったのですが、現在はすべての定期便がキャンセルされ、チャーター便もビエンチャンにしか到着しません。また入国に際してPCR検査結果、ラオス外務省からの入国許可、COVID−19に対応した保険など諸々の条件が提示されています。そして、やっと入国できた暁には14日間の指定ホテルでの隔離です。私も入国のたびにホテル隔離を余儀なくされ、今回2度目の隔離を経験中です。いろいろ興味深い生活ですので、お裾分けします（笑）

GPS

空港で腕時計のような居場所と健康チェックのためのGPSを装着させられます。専用のネジで固定され、自分では外すことができません。これ、なかなかのハプニングが起きました。装着1週間後、画面が不気味に動き、熱くなってきたので、発火しても嫌だと思いホテルから管理者へ問い合わせてもらいました。ところが日曜日はお休み。その後にメッセージが届いて、「バッテリーが無くなるまでそのままに」ということ。えーっ！て焦りましたが、幸いにも数時間で冷たくなりホッとしました。
翌日、担当者がやって来て別の器械と交換。が、その翌日、絶対に取れないはずのネジが取れちゃった！

食事

食事は1日3回お部屋に配給してくれます。宿泊のホテルによって配給方法や食事の内容は違うのですが、私のところはラオス食のお弁当形式。かなりのドカベンです。

多分、食の太い人を基準にしているのだと思いますが、さすがに身長150cmもなく代謝が下がる年齢の私には大量過ぎます。食品ロスをなくしたいと思って「少なくしてほしいな」と言っても個別対応は難しいようで、そのまま。仕方なく残しています。とはいえ、たとえ食べきれなかったとしても運動量がいつもの何十分の一くらいでしょうから、身体の膨張は避けられないですね。でも、とても美味しいです。

Copyright © 2021 Friends Without A Border. All rights reserved.

ラオスのホテル隔離14日間②

必須アイテム

- **ヨガマット：**1回目の隔離で部屋の中をぐるぐる歩くしかなかったので、今回はこれでストレッチとヨガ。いい感じです。
- **ドリップ式コーヒー・お茶：**ホテルからコーヒーを頼むとお金もかかるし、ちょっとしか来ないんです。なので、リラックスアイテムとしては必須ですね。
- **スナック：**リラックスアイテムとしてちょっとつまむものがあるといいですよね。出されたものをずっと食すので、たまには自分で選んだものを口に入れたくなりますから。
- **本：**ずっとたまっていた本。日本だと時間が取れずに積まれていたのを詰め込んで持ってきました。既に2冊終えて3冊目。ヨガマットの上で足踏みしながら読むと脳への刺激になるのかとてもはかどります。
- **洗濯石鹸：**お部屋から出ないのでものすごく汚れてしまうこともないため、毎日のお洗濯ものをチャチャっとやると洗濯ものがたまらずいいですね。そして、ラオスだと手絞りびちゃびちゃでもあっという間に乾きます！

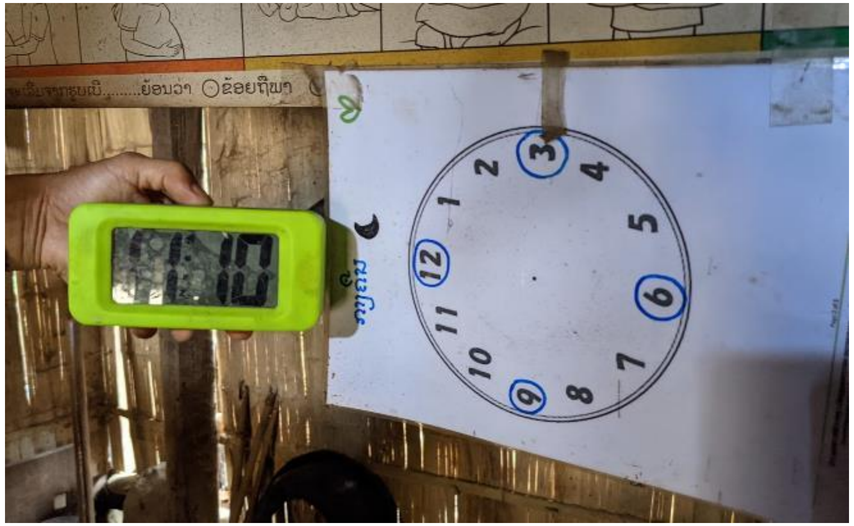
バディと夕焼け

隔離中はホテルスタッフによる配給や検温以外は誰とも接することがないので、窓から外を見て景色の変化や道を歩く人を眺めるのが気分転換になります。そして、今回はロミオとジュリエットさながら、こんなバディを見つけて、愛を語っています。♡癒されます。

これだけ刺激のない生活なので、お部屋から見えるとても限られた景色の変化にも結構気分が盛り上がります。例えばこんな夕焼けとか、こんなスコール雲の出現とか。

Copyright © 2021 Friends Without A Border. All rights reserved.

患者さんストーリー(写真の子はこのストーリーの患者さんではありません)



たくさんの患者さんの中には、院内で治療を終了しても、口からの食事摂取ができないまま退院するケースもあります。その時には、写真のような鼻からの管を通して栄養補給をします。

リーちゃんもその一人でした。最初は髄膜炎で入院し、治療を終え退院しましたが、麻痺が残っていたこと、ご両親ともに耳が聞こえないこと、少し理解力にも問題があったことで、訪問看護でフォローアップを計画。そして、1回目の訪問看護の時、栄養失調になり痩せてしまったリーちゃんを発見。「何がいけなかったんだろう??」と驚きと落胆を感じつつ、まずは病院での治療が必要と判断し、病院へ搬送しました。

入院後、リーちゃんには嚥下に問題があり、口に入れても出てきてしまう量が多いことがわかりました。栄養改善のために鼻からのチューブで栄養液の定期注入を開始し、栄養の状態は改善されていきましたが、嚥下の問題は残ったままです。チューブを入れたままでの退院となり、また、ご家族の貧困問題もあったので、多職種(医師、看護師、栄養士、理学療法士、訪問看護看護師、ソーシャルワーカー)からの視点を盛り込んだ退院の計画を立て、以下のことを決めました。

①栄養補給のための粉ミルクは病院から提供する。アウトリーチが定期的に訪問し、鼻からのチューブの交換、身体チェック、粉ミルクの補充をする。②ミルクの作り方と与え方を退院前に何度も練習をする。どんな水を使うか、というところから指導する。③時計を購入して与える時間を図にして提供する。(写真下)

その結果、今も障がいは残ってはいるものの、チューブを抜去し、口からの栄養摂取で栄養状態は良好になりました。そして嬉しいことに、下痢をした時にはちゃんと脱水改善水(写真左上)を飲ませるなど、ご両親の行動にも大きな変化が。耳が聞こえず、理解力に問題があることで情報が入りにくかったかもしれないけれど、丁寧に教えれば済むことだったのです。これは単に、親が当たり前の知識を得ることがなかっただけの症例だったのだと感じました。知らないことを知らせるための多職種連携アプローチが、今回の成功につながったと思います。一人ではできないこともみんなの力で実現させることができる、自分たちの手でひとつの命をつなげることができる、と、スタッフが実感できた症例でもありました。こうした実感が成長につながりますね。

Copyright © 2021 Friends Without A Border. All rights reserved.

終わりに

あっという間に半年が過ぎてしまいました。

コロナ禍の影響もあり、私はこの半年間、日本で過ごすという異例の状況でした。

こうした日々が前進することを妨げているというご意見がある中、決してそんなことはないと私は思っています。どんな経験でも必ずプラスになっていると思うのです。

私たちが目指すのは、子供たちの健やかな成長と健康です。これからもいろいろ雑音はあるかもしれないけど、子供たちのことだけ、それだけ見て前進です！

ラオ・フレンズ小児病院　看護師

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーJAPAN　代表

赤尾和美

最後はラオスあるある話で締めくくりたいと思います。

半年間離れていた久しぶりの自宅はあっちこっち壊れていて、毎日修理でした(写真左：水タンク修理中）。そして、やっとみんな修理が終わってキッチンもお風呂も使えるな！と思ったら、👆の写真のように、つないだ排水管が取れちゃったり（写真中央）、水の供給のパイプからシューシュー水が噴き出したり(写真右）。「あ～、やっとラオスへもどってきた～」って実感して、ほっとする自分に笑いました。

Copyright © 2021 Friends Without A Border. All rights reserved.